

「少年の日の思い出」における語りの構造

松本 修

1. 教材としての価値と「罪」

「少年の日の思い出」は、昭和 22 年の文部省教科書『中等国語二』に掲載されて以来、多くの教科書に採録され、長い間親しまれてきた教材である。¹⁾ その教材としての価値については、甲斐 1996 に次のようなことが言われており、この教材に対する一般的な見方の一つをまとめている。

「少年の日の思い出」という題は、一方では感傷的な響きを与えるけれども、作品そのものは甘美な内容ではない。すでに子どもまで持ついい年齢の大人が少年のころ犯した罪—美の冒涇—を現在まで心にかかえて生きてきた、職業も美とは関係しないものを選んだらろうという厳粛な内容である。(中略)

この作品の主題は、美しいちょうへのあこがれが強いためにかえってそれを裏切る行為を犯したぼくが、精神面で少年と訣別し、やみをみつめる生き方を求める、ということになる。²⁾

穏当な形でこの作品を教養小説として読む立場が示されている。一方、この作品をより道徳的に読む読み方があるのも事実であり、かつての教室ではむしろこうした道徳的な読み方が支配的であったとも思われる。そこでは少年「僕」の犯した罪の「盗み」としての側面がクローズアップされることになる。最近では、綾目 2001a のような読みが提出されている。

……『少年の日の思い出』にはハッピーエンドもカタルシスもない。それは前非を悔いた者の気持ちが相手に伝わらないからであり、もっといえばその気持ちが相手から「けいべつ」な眼差しで拒否されるからである。『少年の日の思い出』では、まさに主人公の少年が「悟った」ような、「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という、いわば人生の苦い真実が読者に示されるのだ。違う言い方をすれば、『少年の日の思い出』は、読者をカタルシスの中に甘く取り込むのではなく、読者を冷たく突き放し、この苦い真実をどう考えればいいのか、といった問題に向き合わせる話なのである。³⁾

綾目は、この物語をエーミールの側から読んでみることを提案している。それは、「僕」のあり方そのものを再検討させるところにあり、「盗みという罪は本当の意味では贖罪できない」というような規範的道徳とは異なるものの、やはり道徳的な意味あいを持つ。

これに対して、甲斐と同じように、「罪」を「美への冒涇」と捉える立場から、竹内 2001 a

は、道徳的な読みを次のように批判する。

この作品が戦後一貫して中学国語教材でありつづけてきたのは、日本の学校が「自己反省」「自己実現」を生徒に強要する「反省主義」を本質とし、いまもしているからです。この作品がそのような学校文脈の中に投げ込まれるとき、それは「狭い自我（エゴ）の罫いから自らを解き放ち、自己（セルフ）の真実に直面すること」へと生徒を導くのではなく、権力の意図を先取りする反省主義に生徒を陥れるものとなるのではないですか。だからこそ私は、出来事の「わたし」による語り直しと「彼」による再意識化を問題にしたのです。⁴

少年「僕」の罪の本質をどう見るかというような主題把握にかかわる解釈の対立が今も続いていることが窺われる。そしてそれは、竹内の言うように「語りの構造をどうとらえるかという問題」⁵によって導かれている。

2. 二人の語り手

この小説は、この小説は、一行あける形で、導入部の「わたし」と「客」とのやりとりを中心とした場面と、「客」が「僕」という一人称の語り手となって語る、一〇歳から一二歳当時の出来事との二つに分けられている。⁶

物語全体の〈語りの現在〉は、「わたし」と「客」(=「僕」)との再会と会話から時間を隔てた時間であると推定されるが、〈物語の現在〉は、「わたし」と「客」との会話の時間であり、〈語りの現在〉と〈物語の現在〉の距離を示す情報はない。知覚の基点は、再会の書齋に置かれていて安定している。全体の語り手は子どもの成長に伴って蝶の収集を再開したとしている「わたし」である。友人である「僕」の話も、「わたし」の立場から引用ないし再現されている形になっている。

回想の物語では、「わたし」「僕」という二重の語り手の枠は前提されているが、しばしば少年「僕」の知覚・感覚・思考の直接の提示であるかのようにも感じられるところがあり、物語の現在、物語の現場への臨在性が高まっている。つまり、「僕」による回想物語の部分では、〈語りの現在〉は物語全体の〈語りの現在〉と物語中での〈僕〉による語りの場面の現在とが二重になっている形になっており、全体の〈語りの現在〉を意識させる情報が特にないため、「僕」の語りの場面の現在が〈語りの現在〉として前景化していると言える。その上で、回想される一〇歳と一二歳の少年時の〈物語の現在〉が、しばしばかなりの臨在性をもって提示されることになっている。

こうしたこの物語の語りの構造がどのように把握されるかというところに、読みの違いが顕在化している。このテキストでは、いわゆる描出表現（自由間接表現）にあたるような表現がそう多くはなく、微細な部分での解釈の分岐点が明確ではないが、こうしたいわゆる額縁構造をどのようなものとして捉えるかという語りのマクロ構造の把握によって、解釈形成が枠取られるということが起きていると考えられる。

綾目広治 2001a は、次のように述べている。

『少年の日の思い出』は、「わたし」という語り手が「わたし」の家に泊まっているらしい「客」に自分のチョウの標本を見せるところから話が始まる。「客」は、自分も子どものときにはチョウの「熱情的な収集家」であったこと、しかし、「自分でその思い出をけがしてしまった」と語り、あのヤマユガをめぐる出来事を「わたし」に語り始める。つまり、「客」の方が物語の実質的な語り手となっていて、自分も当事者であった出来事を「わたし」に、そして読者に語り出すのである。

これは、物語自体の内部に話者を設定する、いわゆる〈内部話者の方法〉あるいは〈特定視点の方法〉である。注意したいのは、「客」は、「今でも美しいチョウヲ見ると、折り折りあの熱情が身にしみて感じられる」というふうには、現在時の視点から過去を振り返るといふ体裁を一応取って語っているのであるが、物語全体としてはほとんど少年時の視点に同一化してしまっていることだ。そのことは、少年の感情の起伏のままに「客」の語りは進んでいくことから窺われよう。⁷

綾目は、小説の末尾に額縁が欠けていることも、「客」の少年時の視点に一元化された構造を示すものとして捉えている。

一方、竹内常一 2001b では、「盗みと破壊という罪と自己処罰」の物語として「少年の日の思い出」を読んできた「指導書」や「教材研究」に異議を唱える立場から、この点について次のように述べている。

たしかにこの物語を最初に語ったのは「彼」であるが、それを仕上げたのは「わたし」なのである。「わたし」は「彼」と対話しつつ、「彼」の話すのも苦しい話を細部まで聞き取り、その話を「彼」の自己内対話によって確かめ、すじみち立ったものとして「彼」に差し出し、「彼」と対話を再開しようとしているのである。「わたし」が「彼」の語りを問い返しながらか細部まで聞き取り、それを「聞き書き」としてまとめたのである。⁸

語りの構造の把握は二人の間で大きく異なっており、それは、いわば主たる語り手を「僕」とみなすか、「わたし」とみなすかという違いとなって顕在化している。語り手としての「僕」と少年「僕」との重なりをどの程度と見積もるかという違いもある。こうした違いは、解釈の違い、読みの違いにつながる。

3. エーミールと「僕」

語りの構造に対する二つの把握に対応する形で解釈も異なる結果となっているが、それはより鮮明にはエーミールと「僕」の関係をどう捉えるかという点に現れている。

綾目広治 2001b は次のように述べている。

エーミールは本当に怒っていなかったのだろうか。冷ややかな軽蔑的な態度を取るのが、エーミールの怒りの表し方だったかもしれないのではなからうか。それが、「あらゆる点で、模範少年だった」エーミールに相応しい怒り方だったとも考えられよう。

「ぼく」の視点に同一化する読みは、反面、いわばヘッセの術中に陥る危険性がありは

しないだろうか。⁹

綾目は、少年時の「僕」の視点から物語は語られているという立場から、物語を少年「僕」の一方的な語りとして相対化し、エーミールの立場からの物語を想像することを提案する。この、いわば「僕」への批判は「同一化してしまっている」とか、「少年時の感情の起伏のままに」とか、「ヘッセの術中に陥る危険性」とかいう口吻にも現れている。こうした読みは既に指摘したように、一つの道徳的な読みを導く可能性がある。「僕」の直面した苦い真実を考えるというような読みないし学習は、へたをすればすぐに盗みという罪をめぐって、取り返しがつかないという脅しを含んだ道徳につながる。最近では、中学生が、この物語の少年に共感を覚えることなく、「盗みは悪いことでいけない」というような徳目的な感想を述べることもあるという。これはもはや小説のことは小説のことはとて読まないということを示しているが、語りの構造を限定的に捉え、少年時の「僕」の物語に封じ込めることもまた同じような効果をもたらす可能性がある。

エーミールの人物像については、確かにもっぱら少年「僕」・語り手「僕」の側から説明されており、時に感情的である。少年「僕」と語り手「僕」との違いはあまり示されておらず、一貫している。「僕」が「わたし」のように大人になってから蝶の収集に再び手をそめるようなこともなく、過去の出来事を「話すのも恥ずかしい」として回想しているところから見ても、蝶をめぐる出来事について、「僕」の時間や認識は一二歳の時点からあまり変化していないとすることができる。しかし、そのような回想がひとたび語られる時、その語りの行為は何らかの意味合いを帯びる。竹内が着目しているのはその点であり、その語りが「わたし」に向かっていることの意味を問うている。

竹内は次のように述べている。

「わたし」は、一方で、「ぼく」の行為の背後にエーミールにたいする憎しみがあることを暗示しつつも、他方で、エーミールの態度が「ぼく」をそのような行為に追い込んだとし、「彼」に自分を許すように促しているのである。

それ以上に、当時の「ぼく」にも、また今の「彼」にも明確に意識されていない「微妙な喜び」と「激しい欲望」との葛藤、「美」を追い求める「ぼく」と、「美」を「モノ」として操作するエーミールとの対立、「美」に魅了されて、「モノ」を盗み、そのうえに「美」さえも壊すことになる激しい変転、そのために「美」を愛する心さえをもおしつぶすしかない自己疎外を「わたし」が取り出していることの方が重要である。

このようにみえてくると、「彼」は自分を告発し、「わたし」は「彼」を弁明しているといえる。「彼」は自分の行為をいまも有罪としているのにたいして、「わたし」は「彼」に自分を許していいのではないかと暗に語りかけているのである。¹⁰

このようにして、竹内は「わたし」による許しを読み取ることができるものとしている。これは、「僕」の回想物語をも「わたし」による「聞き書き」として、再話者としての「わたし」を想定する語りの構造の把握と密接に関連している。少年時の「僕」にのみ物語の語りが帰せられれば、エーミールとの関係は「僕」から提示された一方的なものであり、その限定的な認識は相対化され批判にさらされるかもしれないが、語りが大人の「僕」や

聞き手そして全体の語り手である「わたし」に帰せられれば、すでに何らかの相対化が行われ、その上でエーミールとの関係が提示されているということになるからである。

たとえば、「僕」の犯した罪を「盗み」とみなすか「美の冒瀆」とみなすかということについて言えば、少年時の「僕」の立場からすれば、盗みとしての意味合いが強いかもしれない（実際に母親の視点が提示されており、母親はもっぱら盗みという罪に着目していると思われる。）。一方、大人の「僕」や「わたし」にとっては「美への冒瀆」という側面が強調されて把握されることになると思われる。このような振幅が「少年の日の思い出」の読みには常についてまわっており、現在もまたそれが続いているということができる。そのような読みの「幅」は語りの構造があらかじめ多様な把握を可能にしているからであり、個々の読み手の語りの構造の実際上のとらえ方が、解釈に類型的な特性を与えているものと見ることができる。

4. 「僕」と「わたし」

千田洋幸 2004 は、少年「僕」の欲望は、エーミールを代表とするような他者の欲望として生まれる社会的なものであり、そのエーミールとの抗争に敗れる物語として見るという読みを提示したが、そこでは語りの構造について次のように述べている。

……チョウへの「熱情」は、「少年」という時間に本質的に根ざした、「自然」化された感情として語られる。しかもその恍惚感は、「幼い日」への回帰をうながすとともに、「今でも」、すなわち語る現在の時間にいたっても、語り手をとらえつづけているものなのである。そして、「ぼく」の「熱情」は、「そうした微妙な喜びと、激しい欲望との入り交じった気持ちは、その後、そうたびたび感じたことはなかった」という言説によって、「ぼく」の内部でいわば神話化され、チョウの収集と一体となった「少年」という時間に対する愛惜が、「ぼく」の語りを推し進める原動力となり、物語の全体を支配しているといってもいいだろう。

だが、じつはそこに、「ぼく」の語りの致命的な錯誤が存在していた。語り手の「ぼく」が、チョウへの欲望を、「少年」の時間のみが生み出すことのできる特権的な出来事として囲いこみ続けるかぎり、チョウ収集の最終的な破綻は、神話化されるべき「少年の日」そのものの崩壊を意味せざるをえない。「少年」の時間をひとつの独立した小宇宙と見なし、その中心または象徴としてチョウへの欲望を位置づけることは、その欲望の無惨な末路ゆえに、逆に「少年」であったかつての自己を憎悪する物語しか生み出しえないのである。¹¹

千田の語りの構造の把握は、大人の「僕」の回想というところに重心がかかっており、その語りが少年「僕」を相対化していないことを問題にしている。それは少年「僕」の甘美なまでのチョウへの情熱を一方的に「美」の側においてきた従来の読みへの批判でもある。このような語りの把握もまた一つのバリエーションであり、それはやはり解釈と対応している。

ただ、竹内の側から言えば、そのような構造自体が「わたし」によって構成されたもの

だということにもなろう。そもそも、「僕」の語りは、「わたし」との出会いの場における共通項によって引き出されたものであるという側面が強い。語りの構造そのものではないが、その共通項をいくつか確認しておきたい。

第一に「わたし」と「僕」の収集の類似がある。「わたし」が子どもに触発されて再開した収集は「軽い厚紙の箱」に入っており、「僕」のかつての収集は「古いつぶれたボール紙の箱」にしまっていた。その点で、つつましさをもっている。そしてまた、「わたし」の子どもの存在によってそもそも少年の時間はすぐそばに呼び出されている。

第二に「わたし」と「僕」はチョウの「美しい形や、濃いみごとな色」を言っており、エーミールのように標本としての完璧さをもとめていない。美しいチョウを追いつめたり、捕まえる瞬間の喜び、いわば美の所有に情熱が傾けられているのであり、形としての完璧さを追っていない。エーミールがヤママユガをさなぎから孵すのは傷がつかないからであり、捕まえる喜びはそこにはない。この小説のヤママユガ（クジャクヤママユ）には、ヨーロッパウチスズメのイメージ（特に生態に関して）が重ねられているという説があるが、冒頭部のワモンキシタバはヨーロッパウチスズメと見た目の共通性があり、少年時の出来事を回想するにふさわしいということも言われている。^{*12}

第三に夕方から夜にかけての時間の共通性がある。「わたし」が「僕」に収集を見せるのは夕闇せまる時間であり、物語の終息する少年時の場面もまた夜である。そこでは自他の区別は闇にとけ、相手の語りが自分の語りと一体化するような感覚ともなろう。ちなみに、クジャクヤママユのドイツ名は *Nachtpfauenauge* であり、ヨーロッパウチスズメのドイツ名は *Abentpfauenauge* である。それぞれ、「夜のクジャクの目」「夕方のクジャクの目」という意味合いになる。

「少年の日の思い出」の語りの構造は三重になっており、どこに力点を置くかは事実上読者に任されている。そこに多様なしかし類型的な解釈が積み重ねられてきた理由がある。^{*13} しかし、このような共通性を前提として、「わたし」は「僕」の回想物語を聞いていることを考えるとき、少なくとも全体の語り手「わたし」をどう位置づけるかを考えることは、個々の読み手にとって自らの読みを相対化する契機となるだろう。

(まつもと おさむ 上越教育大学学習臨床講座)

*1 甲斐睦朗 1996 『文学教材の読み方と実際』 明治図書 p.166

*2 甲斐睦朗 前掲 p.189

*3 綾目広治 2001a 「幼いチョウ収集家の〈逸脱〉」 田中実・須貝千里 編『文学の力×教材の力 中学校編1年』 教育出版 p.205

*4 竹内常一 2001a 「所感交感 語りの構造のとらえ方をめぐって」 田中実・須貝千里 前掲 p.237

*5 竹内常一 前掲 p.235

*6 ここでは、高橋健二訳による「少年の日の思い出」をテキストとし、表記は学校図書『中学校 国語1』平成18年版見本本による。高橋訳による「少年の日の思い出は、『世

界文学全集 37 ヘッセⅡ』(一九六八年 新潮社)、『ヘッセ全集 2 車輪の下』(一九八二 新潮社)『ヘルマン・ヘッセ全集第二巻』(一九五八 新潮社)などがある。もともとは、『放浪と懐郷』(一九四〇(昭和一五)年、新潮社)に収められた翻訳がもとになっている。

*7 綾目広治 前掲 p.206

*8 竹内常一 2001b 「教材解釈と総合学習—H・ヘッセ『少年の日の思い出』にそくして—」 全生研編集部編 『生活指導』566号 2001.6 明治図書 p.67

竹内は、竹内 2001c においても次のように述べている。時系列としては、竹内 2001c が書かれ、綾目 2001a を読んで竹内 2001a が書かれ、最後に竹内 2001b が書かれたものと推定できる。

たしかにぼくは加害者として裁かれなければ、許されないのだが、ぼくも二度にわたってエーミールに傷をつけられた被害者なのである。その意味では、二度もぼくを傷つけたかれの加害行為が裁かれることなしには、受けた傷も癒されないし、かれも許せないし、自分も許せないのである。

ここに「かれ」の話にたいする「わたし」の応答がある。「わたし」はそのように応答するために、かれの話を小説に仕立てたのである。だとすると、冒頭で指摘したように、今度は「かれ」がこれを読んでその罪から解放され、その心の傷を癒すことができたのかを語らなければならない。

しかし、それは読者の一人ひとりに委ねられていることである。それに応えたとき、読者は、「一度起きたことは、もう償いのできないものだ」という「ぼく」の絶望的な断念を超えて、「罪は許される」ことを発見することができるのではないか。そればかりか、読者は「わたし」と「かれ」との対話をひとまとまりのものとして閉じることができるに違いない。

ここでは、綾目とは逆に、閉じられていない末尾の構造は、読者の創造力に対話の続きを委ねる開放的な構造として把握されている。綾目は少年時の視点に閉じる構造として見ている。

竹内常一 2001c 「罪は許されないのか」 田中実・須貝千里 編 前掲 p.231

*9 綾目広治 2001b 「所感交感」 田中実・須貝千里 編 前掲 p.234

*10 竹内常一 2001b 前掲 pp.67-68

*11 千田洋幸 2004 「欲望と他者—「少年の日の思い出」への視点— 東京学芸大学 国語国文学会 『学芸 国語国文学』第36号 2004.3 p.21

*12 <http://ymiyagi.cool.ne.jp/books/hesse.html>

*13 千田 2004 は、「主人公の「成長」や「自己変革」により大きな価値が与えられてしまう教室内のマスター・コードの存在」(p.22)を批判している。これは教養小説としてこの作品を読む読みへの批判ともなろうし、徳目としての道徳に訴える読みはさらに問題だということにもなろう。むしろ竹内のような「わたし」の許しへの参加(竹内は陪審員という言い方をしている)というのもまた手ぬるい教室的な物語だと非難されるかもしれない。だが、読みが語りの構造や細部の語りに対応しているものである限り、類型化することは避けられないし、そうでなければ互いに理解不能であるとも言える。ただ、それぞれの読みはそれを相対化することと相俟って読みとして成立するものなのであろう。